



# 遊散船

笑福亭 松鶴

へエ、一席演らして頂きます。四季にお遊びも澤山御座りますが、夏は川遊びで、東京は兩國の川開き、京は河原の夕涼み、鴨川へ床が出来て、雪洞に灯が點いり何となく好しい物で、大阪は水の都と申しますで大川の夕涼み、仲の好い友達が二人連れで、夕方から浴衣がけで難波橋へ参りますと、下は行交ふ遊散の船、その賑かな事（三味線、太鼓囃子）

西瓜へ……市岡新田ぢやいなア……皮のきわまで眞赤いの……氷、氷、かん氷、かん氷……そばいやう……玉

屋揚げてや……シューボン……親玉……

「オイ喜イやん、上を見んと下を見い、兎角此の世は下見て暮せ、上を見たら限が無いと云ふが、下を見ても限が無いナ……オイ、何處を見てるねん」

「賑かに聞へるのは何處や」

「川の中やが、川を見んかいな」

「先程から見てるが、眞暗で何も見えへんがな」

「こんなに灯が點つて、晝みたいながな」

「冷とうて、暗……」

「阿呆やナア、冷とうて暗い筈や、橋の欄干に目をひつ附けて居るよつてにや、欄干の上へ首を出しんかいな」

「折角やけど上へ出んは」

「何でやねン」

「背がとゞかんねン」

「ぐつと延しんかいな」

「これで決着一ぱいや」

「小さい男やナア」

「オイ、清やん、三人寄れば満座やで、別に満座の中で恥辱をかゝさいでもえゝがな、私でもこれでゆつくり六寸着るで」

「六寸着たら一人前や、三尺六寸か」

「イヤ、二尺六寸や」

「子供やがな、欄干の間から首を出しいな」

「イヨウウ、此の間の雨續きで上の堤が切れたが仰山家が流れて來てる」

「阿呆やナ、家やない、あれは皆船や」

「ア、ぎいこん／＼か」

「船をぎいこん／＼やて、子供やが」

「二階附きの船やな、手摺が附いてる」

「あれが大屋形や」

「お前が何時も錢を借に行く處か」

「それは親方や、大きな屋形船で大屋形と云ふねン」

「そんなら此方にあるのは、小さい屋形船で小屋形か」

「小屋形と云ふ事があるかいな、あれは通ひ船、此方にあるのんが茶船と云ふねン」

「仰山あるな、川の中は船で詰つてる、小さい船は涼しいがあの大屋形は暑いやろう」

「何んでや」

「障子が閉つてあるがな」

「あの障子は開けるのんや」

「ほんにあけた／＼、ヤアー綺麗な姐さんが大勢乗つて